

しば子先生の

ミ

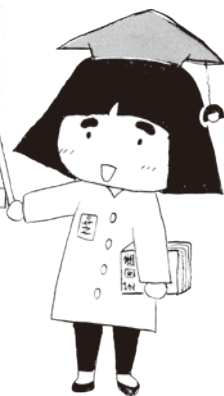
ニ

ミ

ニ

芝生教室

第 113 回 液？粒？



先生：前は肥料設計の例を作ってみたけどどうかしら？あくまで基本的な考え方だからこれを基本にして条件次第で変えていくのがいいわね・・・

生徒：緩効性肥料だからこそできるシンプルな肥料設計ですね・・・ところで今回は粒状肥料だけの設計ですけれど液肥では肥料設計できないのでしょうか？

先生：そこはポイントね・・・**液肥散布**と**粒状肥料散布**の違いについての説明はしてなかったわね・・・液肥の散布は散布水量の違いで『**葉面散布**』と『**一般散布**』に分かれるわね・・・第 41 回で葉面吸収について説明しているから読み返してね・・・粒状肥料との比較は散布水量 120cc/㎡以上の『**一般散布**』との比較になるわね・・・

生徒：葉面散布 30cc/㎡と一般散布 120cc の間での散布はどちらになるんでしょうか？

先生：一般と葉面の中間の散布になるわね・・・基本一般散布になるけど葉面散布の効果も期待できるといふ所かしら・・・

生徒：なるほど・・・

先生：基本的に一般液肥散布と粒状肥料散布はどちらも**肥料成分を土壤に浸透させて芝生の根から養分を吸収させるシステム**で結果は同じだわ・・・

生徒：でも実際グリーンなんかの場合液肥の使用率が大きい様に思いますが・・・

先生：その傾向はあるかもしれないわね・・・でも管理コストを考えると液肥の多用は考えものね・・・

生徒：コストですか・・・？

先生：そうよ・・・多くの場合液肥と粒状肥料の特徴や性質を理解してないで安易に液肥散布の選択しているような気がするわね・・・

生徒：そうなんですね・・・液と粒じゃ全然違うような気がします・・・

先生：一番勘違いしているケースは『**肥料焼け**』の可能性ね・・・肥料焼けについては第 87～89 回で説明しているからもう一度読んでね・・・まずこれをよく理解すれば液肥でも粒肥でも怖くはないわね・・・

生徒：はい、肥料の水溶液と根や葉の細胞内の水溶液との濃度差が肥料焼けの原因でした・・・

先生：そういうこと・・・その

過大な濃度差の状態を作らないこと・・・それを避けるためにはどうするか・・・それが大切・・・そのうえで費用対効果の高い肥料の選択を行なうこと・・・まず粒状肥料で肥料焼けを起こすかどうかの重要なポイントはその肥料が『**水に溶けやすいかどうか**』と『**粒の大きさ**』、そして『**散布量**』ね・・・即効性で水溶性の高い肥料は短期間でいっきに濃度を上げる可能性があるということ・・・そして粒の大きさ・・・細粒・小粒・普通粒で散布する㎡当たりの最低量が違うわ・・・細粒より普通粒の方が最低散布量が相対的に大きくなってしまっているので注意ね・・・だからこそ水に溶けにくく、ゆっくり効果を表す『**緩効性**』の肥料を選択することで肥料焼けの可能性を下げることができるのね・・・

生徒：なるほど・・・それに比べて液肥は濃度を変

えれば**どんなに薄い濃度でも散布可能で均一性に優れている**んですね・・・

先生：そのとおりね・・・

尿素が窒素 46%でも薄

めればいくらでも㎡当たりの窒素量は落とすことができるけど、粒肥の場合例えば普通粒では㎡当たり 20g 以下にはできないわ・・・ただ液肥でも撒きムラや高濃度で撒けば肥料焼けを起こす可能性はあるわね・・・そして大事なのは粒状肥料を均一に撒く**スプレッダーの選択と設定**が大事・・・農業用の手押しスプレッダーでは細粒や小粒は撒きムラになってしまうし、歩行スピードも速足ぐらいで播かないとムラになるわ・・・そしてもう一つ『**後散水**』！・・・これがあれば粒肥が朝露などで葉っぱに付着して葉やけを起こすことはないわ・・・液肥は低濃度で均一に撒くのに優れているので微調整的な散布は得意だけど、年間液肥だけでは十分な養分量を入れるために膨大な回数撒かなくてはいけなくなる・・・対して粒状肥料はある程度以上の成分量を一度に撒くのに優れているわ・・・だから緩効性との組み合わせが最高ね・・・それに液肥より**粒状肥料の方が緩効性の技術の選択肢が多い**ということも重要・・・肥料も芝生管理の重要なツール・・・それぞれの特性を生かして適材適所でしっかり散布すること！

しば子先生への質問や励ましのメールはこちらへ・・・
shibako@hugh-enterprise.co.jp

